

発表者側はそれを認めた。この問題については更に藤原が、「同じ」という概念についての言語的発達をも考慮する必要があることをのべた。また波多野は、操作の発達とMA (Binetテスト)との並行関係を取り上げ、通常この両者が独立しているとみなされていることを示し、この両者間にずれのある子どもの、条件分析を行う必要性があることをのべた。このことに関し児玉は、Binetテストが能力の累積に、またPiagetテストが接近の複雑化に関係していることを述べて、構造の複雑化が身につかなければ能力は身につかない。両者の転移関係を、今後検討する必要がある。」と指摘した。次に結果の地域差について、児玉からその解釈の仕方が問われたが、下山(東京学芸大)は、「教育効果の差をみる意図はなかった。何が地域差の主要な原因であるかをみる為には、今後生活経験の差の内容分析が必要である」と答えた。更にこの問題については波多野から、文化差の影響が、Binetテストほど顕著ではないがPiagetテストにも認められることが指摘された。更に清水が、教示の言語理解に差があったのではないかと質問したが、下山は、その影響は少なかったと思う、と答えた。更にこのことに関して白井()は、測定者によるMAの変動を防ぐという観点から、WISCの方がBinetテストよりも安定度において優れていることを指摘した。

224については、藤原から、保存の成立と測定操作の確立との前後関係について質問があり、そのずれの個別的な検討が必要であることが示された。また波多野から、結果と結論の結びつきが明確でないとの指摘が

あった。

225については、結果の処理として χ^2 検定を行うことの可否が最初問題になったが、結局 χ^2 検定でよかったことに落ちついた。また方法論について、1刺激変化法でなく2刺激変化法を採用したことへの問いが出されたが、発表者側は、1刺激変化法では教示の与え方が非常に難しいこと、また、1刺激変化法と2刺激変化法との関係が明確でないので、従来どおり2刺激変化法を用いたこと、を答えた。またここで岡本(京大)が、具体的操作期の測定手段として保存実験を用いることの妥当性について、問題提起を行った。ここでは、一口に具体的操作期を扱うといってもその実験課題はバラバラであり、1~10才ではきれいな結果を示すが、5~7才という比較的短期間では条件差が大きくて、保存と推移律とが必ずしも同調するとは限らない、ということが指摘された。このことについて波多野は、Piagetはover-structure的などころもあるが、構造が発達するという基本概念は重要である、と述べた。

226・227については、中塚(お茶の水女子大)が、言語課題の与え方について尋ねたが、発表者は、小冊子形式によったと答えた。また藤原から、仮説と結果の関連について質問があり、それに相当する結果の欄が示された。この発表では訂正が多かったため、総じて非常にわかりにくく、問題点の提起という形での討論はなされなかった。

(八野正男・西山佐代子)

発 達 (228~236)

- 座長 丸山尚子・三神廣子
- 228 あそびとおもちゃの相互作用—その1—
 日本女子大学 ○高橋美津子
 " 高橋たまき
 " 横山浩司
 " 守屋国光
 " 飯長喜一郎
 横浜国立大学 平出彦仁
- 229 あそびとおもちゃの相互作用—その2—
 日本女子大学 ○飯長喜一郎
 " 高橋たまき
 " 横山浩司
 " 守屋国光
 " 高橋美津子

- 横浜国立大学 平出彦仁
- 230 幼児における特定の物への愛着行動について
 東京都立川短期大学 斉藤浩子
- 231 幼児期における「手の労働」に関する発達心理学的研究
 一とくに手の発達と共同性について(その2)—
 徳島大学 ○丸山尚子
 お茶の水女子大学 久米隆子
- 232 物語完成法にあらわれた反応の質的分析
 東京少年鑑別所 坪内宏介
- 233 (発表取消)
- 234 読書レディネス
 一幼稚園での文字学習と小学校での
 国語学力の関係—

- 一宮女子短期大学 三 神 廣 子
 235 幼児の問題行動の発生機序に関する研究 (Ⅲ)
 聖心女子学院専修学校 ○大 野 澄 子
 聖心女子大学 岡 宏 子
 " 山 本 寛 子
 " 中 川 美智代
 " 谷 川 弥 生
 " 茂 木 真 理
 236 幼児の問題行動の発生機序に関する研究 (Ⅳ)
 聖心女子大学 ○岡 宏 子
 " 山 本 寛 子
 " 中 川 美智代
 " 谷 川 弥 生
 " 茂 木 真 理
 聖心女子学院専修学校 大 野 澄 子

I 全体的特徴

参会者が80名を越す盛会さであった。そのもとで終始熱心に発表者との間で質疑応答、討論がくりかえされた。しかし、質問時間、討論時間共に足りなく、不十分なままで終わってしまったことは残念であった。

この室で発表されたテーマは6件であったが、内容は種々にわたるものであった。しかしいずれも従来までの研究をさらに一歩進めようとするねらいをもったもの、あるいは現在における幼児教育のあり方の一端を問おうとする、まさにnowな課題にせまろうとするものなどで、それ故に参会者からは貴重なしかもするどい問題点の指摘、示唆が得られた。

II 討論の内容

ここでは記録の不備等から質問時間および討論時間におけるやりとりの全てを再録することはもちろん、主要な点に関しても正確に紹介することが困難なので、指摘された問題点の主なものを紹介することにとどめることでおゆるしを得たい。

228, 229 (高橋, 飯長他) に関して「大変面白く、興味深い研究であるが、おもちゃの機能をreduceして4つのレベルに段階づけの際の根拠は何か、また、機能をreduceされたおもちゃは、子どもの側からみた場合、何に見たててもいいのではないか(創造性などの関連から)、実験者の意図(トラックとみたてさせる)そのものに無理がありはしまいか」「実験においても共同の遊びへの発展をみているが、実験場面以外での仲間関係はどうなっているかを見落としてはならないのではないだろうか」(以上、村越; 中央大)「巷に

はんらんしているおもちゃ、その中には商業ベースにのって首をかしげたくなるようなものも少なくないという現実、また遊びたいにも遊び場がないという現実、こうした現実との関連もみのがせないのではないか」(松本; 立正大)などの指摘がなされた。

230 (斉藤) に関しては、「愛着物をもつ子どもにおいて、夜泣き、夜尿等とどういふ関連があるのかを明らかにする必要があるのではないか」「調査において利用される母親の判断はどの程度信用できるのか、その信頼性をどのようにしてチェックするのか」(横山; 慶応大)「愛着物を持つ子どもの愛着行動とねむり行動の間には深い関連があるが、その際、どんな子において愛着行動がねむりの時だけで終り、どんな子において他の場合にも固執してみられるのかを明らかにする必要があるのではないか、と同時に愛着行動を問題行動と判断するしかたが園により地方により異なる点を考慮する必要があるのではないか」(岡; 日本女子大)などの指摘、示唆がなされた。

231 (丸山他) に関しては、「手の機能、技能の発達と共同性との関係をもっと明確にしていくべきではないか、このまゝではむしろコミュニケーションの発達の研究と受けとられはしまいか」(村越; 中央大)「わが国では、『手の労働』という言葉がまだfamiliarになっていない、そこからいろんな誤解が生れてくる、この点にもっと配慮すべきだ」(松本; 立正大)「手の技能の伸びをどのようにしてチェックするのが問題ではないか」(横山; 慶応大)などの指摘がなされた。

232 (坪内) に関しては、「道徳性テストを使用する際には問い方によって結果が異なってくる、そうした中で、意識と行動との差が明確に出てくるものがないだろうか」(岡; 日本女子大)「書くという行動をどうとらえるのか、とくにテスト場面において文章を書く(完成させる)ということは行動のどの水準を測定することになるのだろうか、この点を明らかにする必要がある」(横山; 慶応大)などの指摘がなされた。

234 (三神) に関してはnowなテーマだけに質問が集中した。「まず継続して研究をつづけておられることに敬意を表したい、研究の内容に関しては、文字指導そのもののあり方についてもう少し検討した上で結論を出さねばならないのではないか、また、要求との関連にしても、要求にそっているか、いないかの判断を実際に何にもとづいてするのか、きわめて困難ではないか」(村石; 国立国語研)「レディネスについての考え方に疑問がある。レディネスはそなわるのを待つべきものでなく、実験者が考えているプログラムとの関連教授、学習過程との関連できまるものである。その点

からして、4才代でも文字指導が可能でありかつ有効な成果をもたらすという考え(データ)をもっている。その場合問題なのはプログラムであって、そこでは話しことばの指導と文字指導とを対立させてはいけない。理想的な文字指導のプログラムを組んだ上で結論を出すべきではないか(天野; 九大, プログラムに関連する指摘は、他に横山; 愛知県立大からもなされた。)「国語字力との関連のみみているが、他の字力との関連および、幼稚園での文字指導以外の保育のあり方との関連をみていく必要があるはしまいか(村越; 中央大)「園での文字指導の有無との関連をみているが、本当にそうか、つまり本当に文字指導の有無のせいなのか、それとも園での聞く、話すなどの経験の深さの差とみなされる点はないかどうか(藤田)など、活発にやりとりがなされた。

235(岡, 大野他)に関しては、司会の不手際により討論の時間がなくなってしまったため、質疑応答のみに終わってしまった。「研究をすすめるにあたっては、常にその方法に関して反省し検討しなおし、確かめていく態度が必要だ」という発言に関して、高く評価したい。その上で、問題行動の問題性を明確にしつゝ、問題となる子どもたちの社会階層間の内容分析とすすめるべきではないか、また、異なる子ども間での検討のみでなく、縦断的な研究が必要となってくるのではないか(松本; 立正大)などの指摘が、短い時間ではあったがなされた。

何分にも不慣れな司会のせいで、十分討論がなされなかったのみでなく、司会をすることで精一杯で、記録が不備をきわめ、十分な紹介ができなかったことをおわびしたい。

発 達 (237~245)

- 座長 戸 田 晋・一 谷 彊
- 237 乳児期の母子関係
 —Attachment の形成に関する発達心理学的研究—
 お茶の水女子大学 岡 野 雅 子
- 238 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ発達(4)
 一言語的コミュニケーションを中心とした母子関係行動の分析方法についての検討その1, 目的と方法—
 北海道大学 ○浜 名 紹 代
 “ 三 宅 和 夫
 “ 伊 藤 則 博
 “ 臼 井 博
 北海道教育大学 後 藤 守
- 239 母子関係の成立過程と乳幼児のパーソナリティ発達(4)
 一言語的コミュニケーションを中心とした母子関係行動の分析方法についての検討その2, 結果と考察—
 北海道教育大学 ○後 藤 守
 北海道大学 三 宅 和 夫
 “ 伊 藤 則 博
 “ 浜 名 紹 代
- 240 親子関係の認知に関する発達心理学的研究
 九州大学 古 川 綾 子

- 241 青年期における親子関係(その2)
 —親子間の対話—

- 三重大大学 ○戸 田 晋
 愛知学院大学 大 西 誠一郎
 “ 千 野 直 仁
 “ 酒 井 亮 爾
 静岡大学 石 川 透
 “ 田 中 鉄 也
 愛知教育大学 武 上 薫
 名古屋大学 久 世 敏 雄
 岐阜大学 返 田 健
 名古屋女子大学 三 輪 弘 道
 “ 平 林 進

- 242 青年期における親子関係(その3)
 —親子間の対話—

- 愛知学院大学 ○千 野 直 仁
 “ 大 西 誠一郎
 “ 酒 井 亮 爾
 三重大大学 戸 田 晋
 静岡大学 石 川 透
 “ 田 中 鉄 也
 愛知教育大学 武 上 薫
 名古屋大学 久 世 敏 雄
 岐阜大学 返 田 健
 名古屋女子大学 三 輪 弘 道
 “ 平 林 進